災害地、紛争地でAMDA奮闘

大規模な自然災害や地域紛争などの現場に急行し、迅速な救援活動を行うNGO（非政府組織）の地球規模の活躍が目立つ。中でも奮闘めざましいのが、岡山市に本部をおくAMDA（アジア医師連絡協議会、菅波茂代表）だ。長江では大地震に見舞われた中国・雲南省やインドネシア、ビアク島に医師や看護婦を急派した。旧ユーゴでは長期的な人道救援活動を継続中である。彼らを駆り立てる原動力は何か。ニッポン像を問とする「世界のAMDA」のがんばりは、二十一世紀の国際貢献のあり方を示唆している。

被災地の麗江から搬送されてきた負傷者を待ちうける医師ら＝今年2月、中国・雲南省の昆明白雲飛行場（AMDA撮影）

情報、人脈こそ〝命〟

許可待ち1カ月 まず物資輸送を求める

中国・雲南省で医療活動 看護婦 加藤奈津子さん

中国・雲南省北西部の麗江ナシ族自治県で二月三日、マグニチュード7の地震が発生、二百三十人が死亡、一万四千人が負傷した。AMDAは発生から二日後の二月五日に第一陣（調整員、医師、看護婦各一人、同七日には第二陣（調整員二人、医師二人、看護婦一人）、さらに三月七日には調整員一人を中国に派遣したほか、医薬品や食糧も送るなどすばやい対応を示した。第一陣のメンバーだった看護婦、加藤奈津子さん＝三大阪市＝の活動報告を紹介しよう。

二月五日、関西国際空港を飛び立った加藤さんは、被災地の麗江から約六百キロ南の昆明に到着した。しかし、被災地入りは危険なこともあって中国政府からの許可がおりない。そこで昆明にとどまり、情報収集をしながら、地震による重傷者が次々と運ばれてくる人民病院で診察への助言を行った。

「昆明の病院の医療スタッフは奮闘していたが、設備は満足できるものではなかった。救急車の装備も不十分だった」

運ばれてくる負傷者は、被害のすさまじさを物語っていた。しかも、現地の病院はほぼ全滅したらしいと聞いた。

いつまでも現地入りの許可がおりないので、加藤さんはAMDA本部に対し、当面の活動を救援物資の輸送にしぼるよう提言した。

「テレビのニュースでみると、被災者が道端でふとんを敷いて寝ていた。何より毛布、衣類、薬を送ってもらうように頼んだんです」

岡山空港に側面倉庫をもつAMDAでは、さっそく地元に呼びかけ集めた三十五トンの物資をチャーター機で中国へ搬送した。

雲南省への救援物資の積み込み作業をするボランティアたち＝岡山空港の格納庫（AMDA撮影）

被災地は少数民族の自治区でもあるので、雲南省当局は混乱による政情不安を懸念しているようだった。

しかし、AMDA側の粘り強い交渉で、雲南省当局は「復興に協力するなら」という条件で被災地入りの許可をだした。ようやく約一カ月後の三月七日、AMDA側の日本人調整員一人が中国の医療スタッフと麗江に入ったのだった。

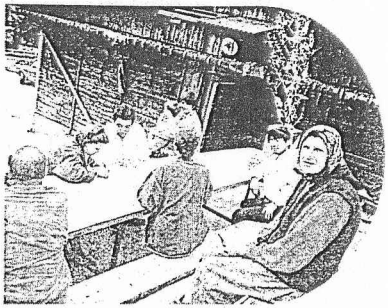
「厳しい状況での活動が多いNGOには、情報と人脈が命。今回も現地の協力者と中国人留学生に助けられた」と加藤さんが言うように、AMDAがさまざまな国にもつ支部と地元の団体など多様なネットワークが威力を発揮している。

これまで、他のNGOや海外青年協力隊などで約一十年の海外活動の経験がある加藤さんは「不便なところに行くほど人の顔が近くなり、医療の原点が学べる。どこまで出来るかを試してみたい」と話す。雲南から帰ってまもなく、今度はアフリカへ旅立っていった。

旧ユーゴで初の海外活動 看護婦 秋田美乃枝さん

砲弾の下、ニーズ調査

2ヵ月間休まず報告書作り



クロアチアの難民キャンプで、日本の折り紙を教えるボランティアたち。こうした「心のケア」が求められている（AMDA撮影）

看護婦の秋田美乃枝さん（三）は、初の国際ボランティア活動を停戦前の旧ユーゴで経験した。

「雑誌でAMDAの存在を知り、どうしても海外で活動したかったから、現地の状況なんかも考えず、即OK（旧ユーゴ行きを）したんです」

勤め先の神戸市内の病院で「半年間休職したい」と申し出た時、「ミサイルにあたりに行くつもりか」と上司から怒鳴られた。それを何とか説得できたのは、看護婦としての情熱だった。

九四年七月から九五年二月まで、クロアチア・リエカに赴任した。戦争で傷ついた人たちの心のケアと職業訓練、教育など多様なソシアルサービスを秋田さんは受け持った。AMDAは旧ユーゴ支援に際して、三年にも及ぶ戦闘から考えて緊急の医療行為だけでは間に合わないと判断し、他のNGOとの連携を強調した。

秋田さんのいたリエカは、本来はアドリア海に面したリゾート地である。ヨットハーバーもあるのどかな風景が広がるが、当時はボスニア・ヘルツェゴビナからの難民約七千人とクロアチア内の被災民約三千人がいた。

「ニーズ調査のため難民センターを回るのですが、皆やせていて、うつ病気味でした。男性はアル中になった人も多かった」

秋田さんはまた、民族紛争の現実を直視せざるをえなかった。

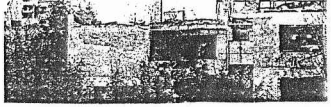
「クロアチアでは、セルビア人居住地区での支援活動の話は禁物で、くってかかられることもしばしばでした」

リエカは建物の被害は少なかったが、人々の疲れ切った表情が戦争のつめ跡の深さを物語っていた。少しでも緊張を和らげるために、子供劇場や民族祭典のコンサートなど、レクリエーション活動を加えることが不可欠だった。

セルビア人支配地区を国連防護軍とともに視察した医師らは緊張と防弾チョッキで五キロやせて帰って来た。秋田さん自身も、砲弾の飛び交う前線のクロアチア東部の国連保護区を訪れた時は、蜂の巣のようになった建物に驚いた。水も作物もないところで人々は生活していた。

停戦は常につかの間だった。秋田さんは少しでも早くニーズ調査をすませようと、約二カ月間、朝六時から午前一時まで休みなしに働き、報告書を書き続けた。

「『人自由なこと』が多かったけれど、やればやっただけ、人々の笑顔が返ってきたので、甲斐があった。言葉や習慣の違いのなかで、相手の心を読むうちに看護の基本が学べたような気がします」



爆撃で壊された建物。町には食料はなく、電気も水もなかった＝94年11月、クロアチア・ビハチ（AMDA撮影）